

43 自閉症スペクトラム障害のある吃音成人に対するビデオセルフモデリングの効果

研究所 感覚機能系障害研究部 酒井奈緒美、森浩一
病院 第三診療部 金樹英、東江浩美、鈴木繭子

【はじめに】発達性吃音の多くは幼児期に発生し、それが成人期まで継続した場合、その症状は複雑多岐にわたる。国際生活機能分類 (WHO, 2001) に基づくと、成人期には、環境との相互作用を背景に、発話症状の複雑化、個人因子としての感情や認知の問題、社会的行動の制限などが出現し、これらの結果が QOL の低下につながると報告されている (Yaruss & Queal, 2004)。近年、自身の模範的な行動のみから成るビデオを繰り返し視聴することで行動を改善する「ビデオセルフモデリング」(以下 VSM) を吃音の訓練に導入した効果が報告されている。Cream ら (2009, 2010) は、VSM を導入した成人吃音者は導入なしの者と比べて、発話重症度の自己評価が有意に高いこと、吃音による困難度が有意に低いことを示している。また、Chu ら (2015) は、日本人の成人吃音者に VSM を導入したところ、吃音症状は変化しなくとも吃音に関する認知が変容したことを報告している。本発表では自閉性スペクトラム障害 (以下 ASD) と吃音を併せもつ青年に対して VSM を導入した結果、効果とともに留意点が認められたため、その経過を報告する。【方法】症例は 22 歳 (大学 4 年生) の男性。吃音を主訴に来院。就職活動中で、面接で不採用となることが続いていた。初診時に ASD が疑われたため、吃音への訓練 (直接的な流暢性促進と面接練習) と平行して、児童精神科にて精査を実施し、後に ASD と診断された。8 回の言語訓練後、文章音読、自由会話、電話場面の発話を録画し、流暢な発話のみを抽出して 3 分程度の DVD を作成した。自宅にて 3~5 回/週の頻度で視聴し、感想を記入するよう依頼した。VSM 導入前後において、吃音検査法 (吃音頻度の算出)、各種質問紙 (S-24, LSAS-J, OASES, 吃音の悩み、発話への自己評価、発話への満足度) を実施、また導入後に VSM の感想をインタビュー調査した。【結果】視聴開始から 2 週間後に、「目が泳いでいる」「挙動不審」など、吃音ではなく ASD の特徴が多分に反映されているビデオの感想が述べられた。同時にそのような自身の映像を観るのは「つらい」と報告されたため、先のビデオで不快に感じた行動を修正するよう指示して発話を行わせ、それをビデオに撮影した。この映像から ASD 特有の症状があまり強く出ずに流暢に話している場面を集めて編集した映像を再度 VSM として導入した。この映像は落ち着いて観られたとの報告があったため、3 ヶ月間視聴を継続するよう依頼した。その結果、視聴前後で、吃音頻度に差は認められなかったものの、発話の自己評価と発話への満足度が上昇し、視聴後のインタビューでは VSM によって「自分が話せているイメージがもてた」など好意的なコメントも報告された。【考察】吃音と ASD が合併する本症例より、VSM が、うまく発話しているイメージの想起と保持に有効であり、発話への高い評価と満足度をもたらすことが示された。併せて ASD をもつ吃音症例へ VSM を導入する際には、ASD の特性に関してもモデルとなるような映像を作成する必要があることが示された。